

第三版
理工系学生のための日本語表現法
——アウトカム達成のための初年次教育

はじめに——本書の構成

本書のねらいは、専門課程に進む前段階の理工系学生が、将来、卒業論文を作成し、口頭発表を行う際に必要な日本語表現技術を、15回程度の授業で効率よく習得することにある。

第1章では、まず、これからのあらゆる学習の基礎として、書き言葉の基礎を学ぶ。「話すように書かない」ことを理解して意図が正しく伝わる文章を書く練習を行い、学士課程の学生にふさわしい文章力の基礎を養う。

今後、学生のみなさんが幾度となく目にするであろう理工系の論文は、大きく分けて「概要」「導入」「方法」「結果」「考察」という5段階で構成されることが多い。本書で学習する論述の方法もこの5段階に則っており、第2章以下の各章は、それぞれの内容に沿って構成されている。

第2章では、社説などの論説文を題材として、要約の練習を行う。要約の能力は、論文の「概要」および「導入」を書く際に有用である。「概要」は、論文の全体を短い文章でまとめたものである。この概要とともに、論文の内容に関連するいくつかのキーワードがデータベースに登録され、他の研究者が検索する対象となる。他の研究者はこの概要を読んで、論文全体を読むか否か、さらには自分の論文に引用するかどうかを決定する。つまり、その論文の第一印象を決める、非常に重要な部分であると言える。また、「導入」は、研究の背景とその必要性を説く部分である。先行研究では何がどこまで明らかになっており、自らの研究がどのような新しい知見を得るために行われたのかを述べなくてはならない。先行

研究は多岐に渡る場合もあり、そうした膨大な研究の内容を正確かつ手短かにまとめる必要がある。

この「概要」「導入」の執筆には、文章を要約する技術が不可欠であり、これを第2章で学ぶ。

第3章では、ものごとの手順を正確にわかりやすく説明する練習を行う。理工系論文の「方法」では、実験や調査を、論文を読んだ他の研究者が同じ手順で繰り返すことができるように説明する。同じ手順で同じ結果が得られなければ、せっかくの発見も真理とはみなされない。理工系の論文では、再現性が重視される。説明不足のため再現性が損なわれれば、データ捏造の疑惑を抱かれる可能性すらある。手順を正確にわかりやすく説明することが大切であり、これが第3章のテーマである。

第4章は、「結果」に関連する。「結果」は、文字通り研究の結果得られたデータを提示する部分である。数字の羅列である生のデータを、読み手に効果的に伝わるように、わかりやすい図や表にまとめ、これを文章で説明する。さらに、データの傾向や重点を的確に述べるのである。このために必要な技術を第4章で学ぶ。

第5章では、主張する文章の書き方を学習する。理工系論文における「考察」では、データに基づいて結論を導き、さらに、そこから考える次の方向性を提案する場合もある。「考察」では、論理的に整合性があり、かつ、データに基づいた説得力のある主張を展開する必要がある。それに耐えうるだけの日本語力を養うため、第5章では主張する文章の書き方を練習する。

第6章で扱うのは、プレゼンテーションのスキルである。研究の成果は論文という形式のみならず、学会などで口頭発表されることが多い。

大学によっては、卒業研究の単位取得に際し、卒業論文の内容を教員や学生の前で発表することを要件としているところもある。第6章では、プレゼンテーション・ソフトの使い方を含め、自身の意図が聞き手に正しく伝わる発表の技術を磨いてもらいたい。

最後の補章では、レポートや論文を執筆する際に必要不可欠である、注と参考文献の作成方法について記載してある。補章を十分に読み込み、論文等に必要な作法を踏まえたうえで、実際の執筆にあたってほしい。

本書は、理工系の学生を対象としており、研究論文の執筆および発表を念頭において作成されたものである。大学卒業後に直面するであろう、敬語の使い方やビジネスメールの書き方といった実用的な日本語表現法は扱っていない。しかしながら、本書で学ぶ日本語表現の基礎および、聞き手の立場に立った口頭発表方法は、卒業後の社会人生活に必要な不可欠なものである。それらは、コミュニケーションの基礎的技術であり、実社会において大いに通用する。

本書を手にとった理工系学生には、的確な日本語表現方法を身につけることで自身を思うように表現し、その才能をはばたかせてほしい。本書を通じた学習が、その一助となれば幸いである。

2016年7月

編者

第三版刊行の辞

本書は、理工系の大学に進学した初年次学生を主たる対象として、将来卒業論文を執筆したり、その内容を発表したり、あるいは社会人として活躍したりするときに備え、日本語表現の技能を高めていくための教材である。

その内容や構成は、『新版理工系学生のための日本語表現法—学士力の基礎をつくる初年次教育—』が基になっている。今回、第三版への改訂作業に当たっては、東京海洋大学海洋工学部の授業で用いることを念頭に、より理工系らしく、より海洋や船舶の分野らしく、内容を改善していくことにした。特定の大学・学部で用いられている教材を市販化するにあたっては、どこの大学でも活用できるように一般的・普遍的なものに近づけるのが常道と思われる。しかし、出版を引き受けていただいた東信堂社長下田勝司氏の考えは全く違うものであった。東京海洋大学海洋工学部の教科書であることを前面に出すような内容であるべきで、学部の専門的知識に沿ったものというアドバイスを受けた。初版(2007年)と比べ、新版(2010年)は海洋工学部の個性をより強めたものであったが、各方面にご好評いただき、社長の慧眼を再確認する思いが深まった。そこで、第三版の企画では、海や船にこだわった教材づくりを合い言葉とした。なお、この考え方に基づいて、『体育・スポーツ系学生のための日本語表現法』が、本書第三版と同時刊行となった。

さて、初年次学生の資質・能力の面に目を転じると、2009年告示の高等学校学習指導要領による教育課程の改善において、各教科等における「言語活動の充実」が図られたことの良い影響が期待される場所である。すなわち、国語科や外国語科のみならず、理科や地理歴史科・公民科、総合的な学習の時間などにおいて、レポートの作成や論述、口頭発表のような知識・技能を活用する学習活動が指導計画に位置づけられ

ることになった。最近では能動的学習(アクティブラーニング)という呼び方も盛んに行われている。こうした教育課程(いわゆる新課程)で高等学校の学習に取り組んだ生徒が、2015年度から大学に入学するようになってきている。この「言語活動の充実」が十全な成果を上げているとすれば、初年次教育における日本語表現技能に係る授業科目は、その必要性が検討されなければならないであろう。本書の執筆陣が感じる実態では、学生による習得度の差が拡大している。申し分のない、賞賛に値するようなプレゼンテーションを披露する学生が増えた一方で、文章作成やプレゼンテーションで全く要領を得ない学生も以前と変わらず存在している。学士力を修得させるという達成すべき学習成果(アウトカム)について、すべての学生に保障するために、初年次教育において日本語表現法の授業がこれからも必要とされている。したがって、本書が学生の自学自習を支援できれば、意義深い出版になると考えられる。

本書が理工系の学生たちの学びを支援し、有為な人材として社会に貢献できる学士力を身につけ、活躍に繋がるよう、編集代表として心から願うものである。

2016年7月

編集代表 森下 稔

目次／第三版 理工系学生のための日本語表現法——アウトカム達成のための初年次教育

はじめに——本書の構成	編者	i
第三版刊行の辞	森下 稔	iv
第1章 わかりやすい文を書こう ——非文・悪文・話し言葉をなくす	生天目知美	3
第2章 要約文を書こう	古阪 肇	23
第3章 手順の説明文を書こう	大岡紀理子	39
第4章 データの説明文を書こう	森下 稔	51
第5章 主張文を書こう	谷口 利律	69
第6章 プレゼンテーションをしよう	久保田英助	81
補章 文章を書くルールを知ろう ——引用の方法、注と文献リストの作り方	鴨川 明子	105
おわりに	編者	118
著者略歴		126
ワークシート提出課題		129

イラスト：納富 理恵
近藤紀代子

【編者略歴】

森下 稔 (もりした むのる) ※編集代表

1967年生まれ。1997年、九州大学大学院教育学研究科博士課程単位取得後退学
現在、東京海洋大学学術研究院教授。

専攻、比較教育学、タイ教育研究。

主要著作：山田肖子・森下稔編著『比較教育学の地平を拓く—多様な学問観と知の共働—』（共編著、東信堂、2013年）。杉本均編著『トランスナショナル高等教育の国際比較—留学概念の転換』（共著、東信堂、2014年）。ほか。

大岡 紀理子 (おおおか きりこ)

1974年生まれ。2013年早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程単位取得満期退学。
現在、早稲田大学非常勤講師。

専攻、日本教育史、幼児教育。

主要著作：湯川次義編著『よくわかる教育の基礎』（共著、学文社、2012年）。湯川次義編著『新編よくわかる教育の基礎』（共著、学文社、2016年）。ほか。

谷口 利律 (たにぐち りつ)

1977年生まれ。2011年早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程単位取得満期退学。
現在、東京海洋大学非常勤講師。

専攻、比較教育学、西アフリカ教育史研究。

主要著作：長島啓記編『基礎から学ぶ比較教育学』（共著、学文社、2014年）。「仏領西アフリカにおける学校教育の導入と言語教育政策の展開—植民地期教育改革に関する教育関連法をてがかりとして—」『日仏教育学会年報』第16号（単著、日仏教育学会、2010年）。ほか。

鴨川 明子 (かもがわ あきこ)

1974年生まれ。2007年早稲田大学大学院教育学研究科にて博士（教育学）。

現在、山梨大学大学院総合研究部教育学域（教職大学院）准教授。

専攻、比較教育学、マレーシア教育研究、ジェンダー論。

主要著作：『マレーシア青年期女性の進路形成』（単著、東信堂、2008年）。『アジア地域統合講座テキストブック アジアを学ぶ—海外調査研究の手法—』（単編著、勁草書房、2011年）。ほか。

第三版 理工系学生のための日本語表現法—アウトカム達成のための初年次教育

2007年10月10日	初版 第1刷発行	[検印省略]
2010年10月1日	新版 第1刷発行	* 定価はカバーに表示してあります
2016年10月1日	第三版 第1刷発行	

編集代表©森下稔 発行者 下田勝司

印刷・製本／中央精版印刷

東京都文京区向丘1-20-6 郵便振替00110-6-37828
〒113-0023 TEL (03) 3818-5521 FAX (03) 3818-5514

発行所
株式会社 東信堂

Published by TOSHINDO PUBLISHING CO., LTD
1-20-6, Mukougaoka, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0023, Japan
<http://www.toshindo-pub.com/> E-mail : tk203444@fsinet.or.jp

ISBN 978-4-7989-1386-5 C3037 ©Minoru Morishita